

# WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

**12**  
2024  
December  
No. 542



横浜ユニオン教会を訪問した女性部会のメンバー（11月25日）

こころの扉——「共に愛と平和の灯として」赤井悠蔵 .....	2
被災地輪島で追悼と鎮魂ならびに復興祈願式を挙げる .....	3
和解の教育タスクフォース主催 第3期『平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー』実施 .....	4
女性部会が宗教別学習会を開催 .....	5
ACRPアジアントラストィーズ会合 .....	5
KCRP青年委員とのオンラインミーティングを実施 .....	6
パグウォッシュ公開講座 .....	6
平和研究所 第6・7回研究会 .....	7
『平和のための宗教 対話と協力17』を発刊 .....	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動 .....	8



## 「共に愛と平和の灯として」

キリスト教では、平和とは単に争いがない状態ではなく、神の秩序が行き渡った状態のことであると考えます。神の秩序とは愛以外にありません。そして愛とは、好き嫌いの問題ではなく、むしろ、好き嫌いを超えて相手を大切にすることです。

現代社会には、人間の存在を尊ばない、すなわち、愛を蔑ろにする空気が広がっているように感じます。インターネット上では、自分と異なる考えを持つ人や、過ちを起こしてしまった人への攻撃が止むことがありません。そんな言葉の暴力は、攻撃された人の心を傷つける

WCRP日本委員会  
活動委員会  
カトリック東京大司教区  
大司教秘書・広報

赤井悠蔵



だけではなく、時にはいのちさえ奪います。また、経済格差は広がり続け、大金を稼ぐ実業家たちが注目を集める反面、弱い立場に置かれた人は、単なる経済的困難に留まらず、人としての尊厳を奪われるほどの痛みや悲しみ、苦しみの中に追いやられています。もちろん、現代の全てが悪なわけではありません。現代になって改善された差別や因習も沢山あるでしょう。それでも、かつては当たり前とされていた道徳や倫理を、私たちが見失いつつあることもまた事実だと思います。

このように、道徳や倫理が意味を失いつつある社会の

中で、「それでも」と、愛することの素晴らしさを叫び続けられるのは宗教だけなのではないでしょうか。旧約聖書の創世記1章には、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」と書かれています。また、新約聖書のマタイ福音書22章には、「イエスが神を愛することと並んで、「隣人を自分のように愛すること」が最も大切な教えであると述べたと書かれています。5年前に教皇フランシスコが来日した際のテーマも「すべてのいのちを守るため〜PROTECT ALL LIFE」でした。

愛と平和はキリスト教の専売特許ではありません。死んだら終わり、無になるわけではない。人智を越えた方は間違いなく存在し、この世のいのちを慈しんでおられる。これは、多くの宗教に共通した価値観だと思います。しかし、今の日本は、積極的に宗教を信じる人が少ないだけではなく、宗教団体は怪しい団体、ともすれば危険な団体とさえ見なされています。それでも、だからこそ、私たち宗教者は、愛と平和に生き、その素晴らしさを説き続けなければならないと思います。

日本の社会の中で、一つ一つの宗教団体は小さな群れです。しかし、私たちは手を結ぶことができます。連帯することができず、宗教には、他宗教や他教派を認めず、時には戦争さえしてきた歴史があります。しかし、その負の歴史を乗り越えて、今、私たちは垣根を越えて互いに手を取り合っています。その姿こそが、愛と平和の証しであると言えるかもしれません。これからも、諸宗教の皆様と共に、社会における愛と平和の灯として歩めることを願っています。

## 被災地輪島で追悼と鎮魂

## ならびに復興祈願式を挙行

WCRP日本委員会の災害対応タスクフォースは、元旦の大地震と9月の豪雨の2度にわたって被災した能登半島の輪島市を11月14日に訪問、追悼と鎮魂ならびに復興祈願式を挙行するとともに、輪島市福祉協議会を訪問し50万円の支援金を届けた。

参加したタスクフォースのメンバーは、責任者の黒住宗道師（黒住教教主）、力久道臣師（善隣教教主）、川上直哉師（日本基督教団石巻栄光教会牧師）、田中佑佳子師（立正佼成会）、館野庸子師（解脱会）の5人、事務局から篠原祥哲事務局長とスタッフ3人が同行した。

朝市通りからつながる参道の先に1300年前から鎮座する重蔵神社を訪問、能門亜由子禰宜から状況を聞いた。被災した翌日には、倒壊した社務所から米や塩を取り出しおにぎりの炊き出しを始め、その後全国から届けられた支援物資の配布を行ってきた。今も週に2回物資の配布を実施し、開催日には500人が訪れる。倒壊を免れたものの拝殿は、神事などを行える状態では

なかったが、8月には当初不可能と思われていた夏祭りを斎行することができた。その矢先、9月21日に再び記録的な豪雨に見舞われ、地元住民（氏子）の皆さまと折れそうになった心を鼓舞し、復興へ向け再び歩みはじめた途上だという。

朝市通りの日吉酒造店前で、「追悼と鎮魂ならびに復興祈願式」を挙行した。開式で黒住責任者は、「現地に立ち、復興の進まぬようすを目の当たりにしました。まごころを込め、我がこととして祈りを捧げ、追悼・鎮魂とともに心より復興を祈願させていただきます」とあいさつした。宗教宗派別祈りでは、タスクフォースメンバーに加え、地元から重蔵神社能門禰宜と真宗大谷派長徳寺の旭義崇住職にも参加いただき、7つの宗教宗派がそれぞれの儀式にのっとり祈りが捧げられた。参加者全員で黙とうの後、能門禰宜よりあいさつをいただいた。能門禰宜は、「輪島は、千年に一度の地震と百年に一度の洪水に見舞われ厳しい状況におかれています。特に、この町内の皆さまは、家族を亡くした方も多く、複雑な気持ちで暮らしている方がたくさんいます。今皆さまからお祈りを捧げていただき、大変あり

がたく思います。地域の皆さまとともに復興へ向け歩んでいきます」と述べた。

その後、輪島市社会福祉協議会の田中昭二事務局長を訪ね、支援金50万円を贈呈するとともに被災・復興状況を聞いた。田中事務局長は、「地震による被害は、公費解体の対象となる半壊以上の住宅が6204戸（全壊2295戸、半壊3909戸）、全戸数の59・2%だった。9月の水害直後に90件あったボランティア派遣要請も15件ほどと落ちついてきている。今後、国の助成金がなくなる中で支援をいただけることは



田中昭二事務局長（右から2人目）とタスクフォースメンバー

大変助かる」と述べた。最後に、1・8mの水害被害を受けた輪島市河井町を訪ね、新日本宗教団体連合会（新宗連）の行うボランティア活動を視察した。



## 和解の教育タスクフォース主催 第3期『平和と和解のための ファシリテーター養成セミナー』実施

10月26日～27日、連続セミナーである第3期『平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー』の第2回目が開催された。同セミナーは大学、国際機関、NGO、宗教関連団体の専門家などから、対立変容の手法について学び、足元の課題から国際レベルまで、和解をもたらす人材を育成することを目指し開講している。

第2回目のテーマは「見方をかえる」。多角的に物事を見て、関係性の中で問題を捉えることを主眼とし、25人が参加した。初日の



開講式で、本タスクフォース責任者の山本俊正氏（元関西学院大学教授）が挨拶を述べた。アイスブレイク後、セッション1「対立にどう向き合うかConflictを感じてみる」と題したワークショップを実施。ファシリテーターは第

2期から同セミナーに参加している飯野真理子氏が務め、対立の場面で自分自身がどのような対応を取りやすいか見つめなおした。セッション2・3「対立や和解・修復的正義について」では、片野淳彦氏（東北アジア地域平和構築インスティテュート運営委員長）を講師に招いた。片野氏は「見方をかえる」というテーマに沿い、見方をか

えるためには別の見方を知る必要があるとし、修復的正義を一つの物事の見方となるような講義を展開した。セッション4「多様性、多文化共生パ

ート2」では、本タスクフォース運営委員の松井ケティ氏（清泉女子大学教授）が前回のセミナーから引き続き多様性に対する理解を深める講義を行った。

翌27日、セッション5「和解へのプロセスの応用1ー紛争地域問題から和解へのアプローチへ」と題したセッションでは、原田雅樹氏（関西学院大学教授・神父）を講師として招いた。原田教授は自身の研究分野であるイスラエル・パレスチナを主題とした講義を行い、対立の背景を解説した。講義後、松井ケティ運営委員のもとで対立・問題分析の演習を行い、グループ発表を行った。

全体振り返りでは参加者がそれぞれ①学んだこと、②今後実践したいこと、③これ

から知りたいこと・学びたいことを共有した。また、本セミナーでは初の試みとなる情報交換会を開催した。参加者自身が取り組んでいる活動の紹介や、今後ファシリテーターとして活動していくにあたり、実現したいアイデアなど積極的な意見交換がなされた。

参加者からは「修復的正義を学び、自分の中にもまだまだ固定された見方が無意識のなかにあること、物事には人の感情という部分が大きく関わっていることを学んだ」「パレスチナとイスラエルの問題を教えていただき、現状はもつと複雑で、他の国々の思惑や問題、過去からの出来事までもが絡みあっていることを知り、今噴出している問題は、今だけのことではないこと、その部分も見えていかなければならないことを強く感じた」「普段はひとりで平和に向けて現状を見つめたり学んだり考えることが多く、気持ちも苦しくなることも多かったが、同じ志しを持った皆さんと、平和的な解決に向けて具体的な行動を共に考えられたことが、とても心強く、平和に向け一体となり、また同じ志しの仲間がいてくれる有り難さがひしひしと感じられ、勇気を持てた」といった声が寄せられた。

第3回は、来年4月に実施予定。

## 女性部会が宗教別学習会を開催

11月25日、女性部会は宗教別学習会を開催し、女性部会委員ら8名が参加した。女性部会では、さまざまな宗教施設を訪問するこの学習会を1998年より毎年開催し、諸宗教の歴史や教えを学ぶことを通して相互理解を深め、諸宗教対話やいのちの尊厳についての取り組みを深める契機としている。今年度は、神奈川県横浜市にある4つの宗教施設を訪問した。

はじめに、中華街にある横浜関帝廟を見学。5つある香炉に線香を供え、本殿内を参拝した。次に、山手カトリック教会を訪問。同教会は、1862年の開国後、最初の教会としてフランス人宣教師によって居留地に建てられた。聖堂の中を、ダリール・ディノ神父が説明してくださった。

続いて、横浜山手聖公会を訪問。同教会は、ローマ・カトリックとプロテスタント



双方の要素を兼ね備えた教派であり、もともとは1863年に外国人居留地に住む英国人の教会として、横浜クライストチャーチが建てられた。教会内をアンドリユー・デンジャーフィールド司祭が案内してくださった。

最後に横浜ユニオン教会を訪問。プロテスタントの一派であり、超教派（エキュメニカル）として位置づけられているユニオン教会は、宗派や国籍問わず集まった信徒たちがキリストの体として礼拝することを願い、1872年に建てられた。教会を案内してくださったのは、クラウディア・ジユノン山本牧師。クラウディア牧師は先の2教会にも同行し、女性部会は横浜山手地区の宗派を超えたつながりの深さをクラウディア牧師から学んだ。

## ACRRPアジアントラストエイズ会合

11月28日～29日、シンガポールで、ACRRPアジアントラストエイズ会合が開催された。今回参加したのは、アジアントラストエイズからビージェイ・バジャラチャリヤ（ネパール）、田中常隆（WCRPジャパニーズ・トラスエイズ代表）、五十嵐一夫（同常務理事）、國富敬二（WCRP国際トラスエイズ）、篠原祥哲（ACRRP事務総長）、根本信博（ACRRPスペシャルアドバイザー）らである。

このアジアントラストエイズは2019年に開催された第9回ACRRP東京大会において設立されたACRRP内の新たな組織であり、その目的はACRRPの運営を財的に支えることである。

今回のシンガポール会合では、トラスエイズのメンバーの拡充を図ること、トラスエイズの年会費を一口1千米ドル以上とすることを決定。ACRRPに財的支援を行う企業、団体、財団などのスポンサーを発掘する役割があることを確認した。

また、トラスエイズは、2026年にシンガポールで開催する第10回ACRRP大会に向け、積極的に関係者を訪問しファンドレイズの活動を行なった。シンガポール政府のアルビン・タン大臣（文化・コミュニケーション・青年問題省）との面会では、宗教者による人道活動の重要性や平和におけるAIなどの最先端技術の課題などについて意見交換を行った。その他、



シンガポールのタン大臣との会合

IRO（シンガポール諸宗教組織）をはじめとする宗教指導者やビジネスリーダーと会合し、第10回大会に向けての協力を要請した。



## KCRP青年委員との オンラインミーティングを実施

青年部会は、10月15日（火）にKCRP青年委員会のメンバーとオンラインミーティングを実施した。

本ミーティングでは、日韓の青年世代における自殺の問題や少子高齢化、女性のプレジンス、ライフステージなどの、多岐にわたる観点から青年社会における問題について意見が交換された。幅広い問題が共有された後、参加者から、「どのような問題であれ、心のケアをすることが青年宗教者・信仰者としての役割だと思う」「啓発セミナーなどを行う際は専門家からの講演というより、諸問題の当事者から話を聞くことが大切だと思う」などの意見が出された。



今後は、来年度に予定している日韓青年交流会に向けて、日韓の青年世代の諸問題の啓発手段の検討や、将来の日韓青年の交流のあり方を共

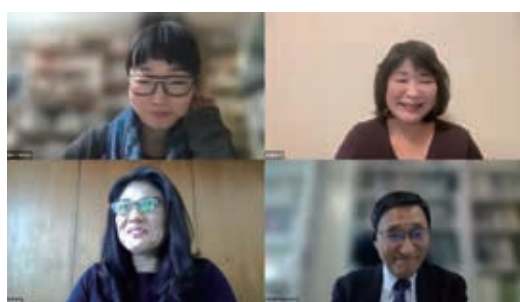
に考えていく機会となるよう継続的にオンラインミーティングを行う予定である。

## パグウォッシュ公開講座

11月8日、WCRP日本委員会と日本パグウォッシュ会議、明治学院大学国際平和研究所（PRIME）が共催する公開連続講座「核時代における非戦」の2024年度第2回講座がオンラインで開催された。

「核時代を考える…映画『オッペンハイマー』で描かれたこと、描かれなかったこと」をテーマに、約100人が参加、視聴した。

はじめに、共催団体のWCRP日本委員会からストップ！核依存タスクフォースの中村憲一郎責任者（佼成学園理事長）が挨拶。



第2回公開講座の様子

中村責任者は、オッペンハイマーが、一科学者と多くの尊い命が失われた現実を突きつけた一人の人間としての自分との間における葛藤

が描かれていたことに触れ、先のアメリカ大統領選挙の結果により世界の安全保障環境の変化が危惧されるときに、とても時宜を得たテーマだと述べた。

講座では、鈴木達治郎氏（長崎大学教授・パグウォッシュ会議評議員）、葛谷楽氏（アーティスト）、金崎由美氏（中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター長）の3名がパネリストとして発表した。鈴木氏は、映画「オッペンハイマー」は、核兵器開発の是非について問題提起や意見交換をする機会ともなり、とても有意義だと述べた一方で、原爆使用・開発に反対をした科学者達のストーリーが描かれていなかったことを指摘した。葛谷氏は、戦争をテーマにした大衆向けの娯楽映画がプロパガンダと関わってきた歴史に言及し、「オッペンハイマー」も国家の公式物語として沿って描いた面と、監督自身が強調して描いた部分があったことを述べた。金崎氏は、日本や広島、アメリカそれぞれの立場から多角的に見て、誰も責められた気持ちにならない映画だったと評価しつつ、軍事作戦の意義やその結末、残留放射線の被害や被爆者の存在が描かれていなかったことを指摘した。

※この講座の動画は、日本パグウォッシュ会議のホームページで視聴できます。

## 平和研究所 第6回研究会

宮本要太郎氏

第6回研究会は10月22日、普門メディアセンター（東京・杉並／オンライン併用）で開催され、宮本要太郎氏（関西大学教授）が『ケアとしての宗教』と題して発表した。

宮本氏はまず、近年政府が行っている地域共生社会の構築について詳説しながら、失われた「ケアリングコミュニティ」について説明し、「ケアリングコミュニティの再創生」について言及した。

続いて、ケアの様々な概念や「cure」と「care」の違いについて説明。他動詞のcureと自動詞のcareを用いて、「cure的な宗教的ケア」は、「ケアの提供者側が専門的な知識や定型化された方法を用いて対象者を『救い』へと導くことを試みる。そこでは、『魂の救済』という『結果』が重視される」とし、「care的なスピリチュアルケア」は、「受け入れがたい現状（さまざまレベルのペイン）を自分の一部として受け入れていく『過程』が重視される」とした。その関係は、「垂直的／水平的」であり、「宗教的ケアでは、対象者だけにその変容が求められるという点で〈垂直的〉であるのに対し、スピリチュアルケアはその提供者にも気づきや成長を促すという点で〈水平的〉であり、互酬的な関係を構築

しやすい」と述べた。

また、「ケアとしての日本宗教」について、神身離脱説や夢告等でみられるカミ／ホトケの特徴、マツルや直会等の日本人の接し方、死者がカミ／ホトケになることやカミ／ホトケと人との相互性・互酬性、さらに「共苦」（compassion）は「共悲」でもあることやhomo curansとしての人間を用いて説明した。

最後に、社会と世間の違いについて言及しながら、「ケアリングコミュニティ」の復活はいかにして可能かという問いに対し、求められるのは良い意味での「世間」の復活であり、その中心を担う可能性を宗教者は有していると述べた。

## 平和研究所 第7回研究会

齋藤忠夫所員

第7回研究会は11月26日、普門メディアセンター（東京・杉並／オンライン併用）で開催され、齋藤忠夫所員（東北大学名誉教授）が『世界の食糧危機と日本の食糧安全保障』と題して発表した。

齋藤所員はまず、世界人口が現在の81億人から2050年に100億人となることが予想されており、将来の食料不足が懸念されると述べた。

過去60年間を振り返ると、世界人口は2・6倍に増えたなかで、小麦の生産量は3・

6倍に拡大することができた。これは、農地拡大と化学肥料や農薬の投入、品種改良による食糧増産の成果であるが、今後の見通しは厳しい。野村総合研究所は、2050年に三大栄養素の一つのたんぱく質の供給が必要に對して7%不足するとの推計を出しており、成人の12億人が1年間に摂取すべき量が足りない計算だという。2030年に飢餓人口が約6億人と予測されるなかで、肥満人口が増加しているとの指摘もある。世界で生産された食料40億トンの3分の1にあたる13億トンが、流通・小売り・家庭それぞれの過程で廃棄されているという。この食糧ロスを半減することができれば、飢餓人口を26%（1億5300万人）減らせるという。

また、日本の食料自給率（カロリーベース）38%は輸入に支えられており、小麦・大豆・とうもろこし・牛肉をはじめとした輸入農作物の23%をアメリカ一國に頼っている。一方で、日本でも年間600万トンの食品が捨てられている。一人あたり年間48kg、毎日お茶碗一杯分の132gに相当するという。

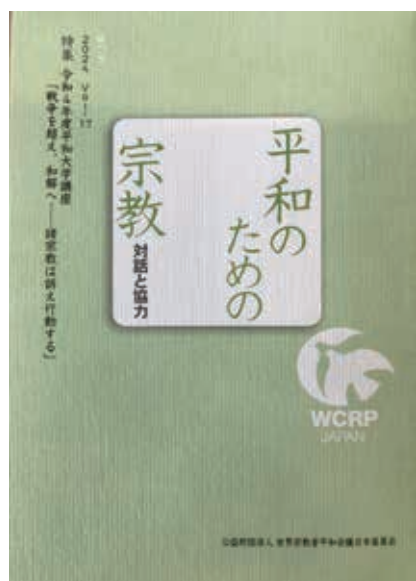
最後に、日本には「もったいない」という言葉があるように、食品ロスを減らすことが肝要であり、そのためには一人ひとりの意識を変えること、それぞれの教団が先導して貢献することが望まれると述べた。

## 『平和のための宗教』

## 対話と協力17』を発売

平和研究所から『平和のための宗教 対話と協力』の第17号が発刊された。今号には、特集として『戦争を超え、和解へ——諸宗教は訴え行動する』をテーマに開催した2022年度平和大学講座と、平和研究所所員8人による2022年度の研究報告を掲載している。

当年度の研究テーマは、『未来の地域社会の平和を目指して——非暴力による対立・分断をのりこえるための宗教者の行動——』。



本誌に収録された研究報告は多彩で、現代において、宗教に基づく平和の実現、他者への慈しみの実践の手がかりを求めたものである。(A5版・240ページ・頒価800円)

## 今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し、新しい熟語を作ります。

## 心集 (ハート)

コミュニハートPJ運営メンバーでリユニオン(同窓会)を行いました！なんでも打ち明けられる関係性は健在で愛と絆の強さを感じました。

## WCRPの活動

## 《12月》

2日 女性部会第2回委員会(清泉女子大学)

2日 平和研究所第8回所員会議(東京・新宿)

5日 災害対応タスクフォース第3回会合(東京・普門メディアセンター)

9日 気候危機タスクフォース第2回会合(東京・普門メディアセンター/オンライン)

13日 第3回総合企画委員会(オンライン)

13日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備(埼玉・所沢)

18~20日 IPCC国際セミナー2024(韓国・ソウル)

23日 ストップ！核依存タスクフォース第4回会合(オンライン)

## 《2025年1月》

24日 第4回総合企画委員会(オンライン)

30日 青年部会第3回幹事会(東京・立正佼成会法輪閣)

31日 理事会、評議員会、新春交流レセプション(東京・立正佼成会法輪閣/オンライン)

掲載内容の無断転載を禁ず。

WCRP12月20日号 令和六年十二月二十日発行(毎月一回)千日発行

第五四二号

発行人 戸松義晴

発行所 公益財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会

〒一六六八五三一 東京都杉並区和田二七一(普門メディアセンター内)  
TEL: (03) 3384-1137 HP: www.wcrp.or.jp Email: rfpj-info@wcrp.or.jp

頒価一〇〇円(一年分一、〇〇〇円(送料共))

(賛助会員の購読料については、  
会費に含まれている。)